

次ページへ続く

Continued on next page...

福井大学附属図書館蔵「大織冠」翻刻

服部 幸造

福井大学附属図書館には幸若舞曲「大織冠」「夜討曾我」の二本がある。今回紹介するのは「大織冠」である。いずれも高島忠夫氏の寄贈になるもので、郷土資料室高島文庫に属する。高島氏は元福井大学教授故岡田正世氏の御父君で、郷土史家として著名な方であった。高島氏の手に入った経路は不明だが、県内で入手されたものであろう。二本とも同一体裁で、本文系統も同じものと思われる。くわしい考察は後日を期するが、「大織冠」の本文系統は幸若系に属し、中でも毛利家本・内閣文庫本に最も近い、ということだけを指摘しておく。以下簡単に書誌と翻刻の要領を記す。

請求番号 HZ TAI 91835

表紙は紺色無地、大きさは一六・一×二二・五センチメートルの横本。見返しは、銀砂子と銀紙とを押し鳥の子紙。

左上に題簽があるが、虫喰いのため判読できない。元は金紙であろう。「大織冠」は図書館による命名である。

袋綴。墨付四九丁。一面二三行。遊紙は首二丁、尾二丁。

書入等、本文の誤脱・訂正を墨で右又は左に書いてある(翻刻では「」

に入れて示した)。本文とは別筆である。「詞」「カタツメ」等の節付も別筆(翻刻では「」を省略した)。への記号は朱で記されており、一字分の空白がある。

内題・蔵書印・識語等はない。

翻刻には、私に句読点を付し、丁の変り目を「」で示した。漢字はおおむね常用漢字にしたがった。

へ夫我朝と申は、あまつこやねのみことのあまの岩戸ををしひらき、
てるひの光もろともに、春日の宮とあらはれて、國家を守り給ふ也。さ
れはにや、かすかをはるの日と書事は、夏の日はこくねつす、秋の日は
みしかし、冬の日はさむけし、春の日はのとけくし、能はんふつをしや
うしやうす。四季に殊更すくれ、めひしつ成により〔苑〕、はるの日と書
たて、春日〔一才〕となつて申也。かの宮の氏は藤原うちにておは
します。ふちはらの其内に大しよくはんと申は、かまたりのしんの御事
也。はしめはもんしやうせうにて御座有けるか、いるかのしんをたひら
け、太職冠になされさせ給ふ。そも此官と申は、上代にためしなく、扱
末代にありかたし、目出度官と成けり。是によつて此君をふひとう共申。
いつもかまをもち給へは、かまたりの〔一ウ〕しんとも申〔成〕。春日
の宮にさんろう有て、あまたの願をたてさせ給ふ。その中に、こうふく
しのごんとうをさいしよにこんりうあるへしとて、しやうこん七ほうを
ちりはめ、しやこんたうをたてさせ給ふに、くはほうはてんよりもあま
くたり、国のなひきしたかふ事、ふる雨の国土をうるほふし、た、草葉
のかせになひくことし。君たちあまたをはします。ちやく女をは光〔二
才〕明光宮とな付奉て、せうむ天王のきさきにたせ給ふ。二女にあた
り給ふをこうはく女とな付て、三國一のひちんたり。へしかるに、かの
姫君のゆうにやさしき御かたち、たとへをとるにためしなし。かつらの
まゆはあおふして、遠山にほふかすみに似、もゝのこひあるまなき
きは、せきやうのきりのまにゆみはり月の入ふせひ、ひすひのかんさし
はくろふしてなかけれ〔二ウ〕は、柳の糸を春風にけつるふせひにこと

ならず。へすかたは卅二さうにし、なさはは天下にならひなし。かゝる
ゆゝしき御かたちの、いこくまでもきこえ有、七御門のそうわうたいそ
うくわうていは伝へ聞しめされて、見ぬ恋にあくかれ、雲の上もかきく
もり、月のともゝをのつからひかりをうしなひ給ひけり。しんかけひ
しやう一とうにそうし〔もん〕申されけるやうは、きよくたいの御ふせ
ひをはよの〔三才〕つねならずおかみ申て候。何をかつませたまふへ
き、ちしんのうちへせんしあれ、とそうし申されたりければ、へ御門を
ひふんましゝて、あらはつかしや、つゝむにたえぬはなのかの、もれ
ても人のさとりけるか。今は何をかつむへき。是より東海すせんり、
日本ならの都にすむ太職冠かおとひめを、かせのへたよりにきくからに
みぬおもかけのたちそいて、わすれも〔三ウ〕やらていかせむ。
ちしんたちうけたまはり、是はめてたき御所望哉。しよせんはちよく
しをたて、りむけんにてむかひとらせ給ひ、ゑひらんあれとのせむきに
て、うむかと申つわものをちよくしにたてさせたまふ。うむかすてに太
宗のきむさつをたまはり、数千〔万〕里のかいりをすき、日本ならの都
につき、たいしよくわんのみもとにて、てうさつをさゝく〔る〕。太職冠
は御覽して、我は是しついき〔四才〕とて小國のわうのしんかとし、い
かにとしていこくの大わうをさうなくむこに取へき、と一度はちよくし
をちたひある。ちよくしたちもとつて、此むねをそうもむす。たいそう
いとゝあくかれて、二度のちよくしをたてさせ給ふ。せうむくはうてい
聞しめし、なさはは上下によるへからす、小こくのしんかの子成共、其
はゝかりはあるへからす。〔丸〕へんてうをいたすとて、かたしけなくも

くわうていのみんはん」(4ウ)をなされければ、ちよくしめむほくほとこして、いそきたちもとつて返状をさゝくれは、太宗おほきにゑいりよあり、吉日ゑらひさうくむかひ舟をそこされけり。今度のむかひのちよくしには、たちはなの朝臣に右大臣ほうけんなり。そも本朝と申は小国なりとは申せ共、智慧第一の国也。みれんの出立かなふましむ、けつかうあれ、とのせむきにて、むねとのたい」(5オ)せん三百そう、きさきの御舟をはれうとうけきしうと名付て、しゆつたんを以かた取、へにはあふむのかしらをまなひ、ともにくしやくの尾をたれたり。船のうへににしきを敷、ちんたんをましへ、くわうようらんけいみかき立、玉のはたは風になひき、こかねのかはらは日に光、くせひの舟とも云つへし。はつひてんくはん玉をたれ、身をかさつたる女くわん侍女三百人すくつて、これは」(5ウ)船中の御かひしやくのためにとて、かさり船にそのせられたりける。しちいきよりもろこしまて数千万里の海上の御なくさめのために、おんかの舞あるへしとて、ちこ百人すくつて身をかさつてそのせられたる。すてに弥生のすゑつかた、共つなとひてをし出す。あまの川瀬にあらねとも、つまこし船のほをあげたり。かくて波風しつかにて、舟は本朝津の国やなむはの浦に着しかは、」(6オ)ちよくしは奈良の京に着。太職冠は請取て、ひとつは異国の国也といひ、」(又)一つは本朝のいくわうのためそとおほしめされ、れ」(さ)んかいの珍菓を山とつみ、五千人の上下を其年の八月半より、明る卯月はしめまでもてなし給ふ。太職冠果報の程そめてたき。へ卯月もやうくすへになりゆきければ、吉日をゑらひて玉の御こしにめされ、なむはの浦迄御出あ

り。それよりれうとう」(6ウ)けきしうにめされ、船は程なくたいたうの明州のみなとにつかせ給ふ。たひりにきこしめされて、すはやこくものきやうけひよ、いさく御むかひにまいらむとて、ひたり右の大臣女くはむところ百くはんけいしやうくはん人しちやうに至るまでも、のころとはまします。抑大国の国の数を申に一千四百四十國、郡の数を申に九万八千余郡、寺の数は一万二千六ヶ寺、市の数を申に一万」(7オ)二千八百、長安の市と申は在家の数は百万間、人の数を申に五十九をく拾万八千人たつち也。道の数はちやうあんちやうよりも十のみちわかてり。けんろけんむたうとはたつみをさしてゆく道、二十六にふみわけり。おくなんたうと申はひつしさるへゆくみち、卅五にふみわけり。さいけいたうと申は西をさして行道、五十九にふみわけり。かうほくたうは北をさして行道、すゑはた」(7ツ)へとうやうたうは船」(7ウ)路にて、すゑは日本につけり。かゝるみちくよりもみつきものをそなへ、きさきをおかみ奉る。あゝめてたや、只一目拝み申ものまでも、ひんくをのかれたちまちふつきの家と成。されはにや、くはうていもなれちかつかせたまへは諸病をいやし、たちまちに、へやうしやうの大いにあへるこゝちして、御持の間世すなをに、民のかまともゆたか也。かくて過行たまひけるに、きさきの宮思」(8オ)食、我小國のものとなりなから大こくのきさきにそなはりたる其こうめひを、日本にのこしてこそとおほしめし、御ちち太しよくはん、こうふくしのこんたうおなしき釈迦のれいさう御こんりうあるへきに、彼御たうのせにうにふつくほうくをくつて、末代のかたみ共なきはや、と思食、へそろへ給ふたからに

は、まつくわけんけいしゆひんせき。くわけんけいと申は、うちならし」
(8ウ)てのその、ちにごゑさらになりやます、と、めんと思ふ時には
九てうのけさをおほふ也。しゆひん石は硯。彼硯のとくゆうは、水なく
して墨をすつて心のまゝにつかふ也。梵ほむの法花経をたらようにて、
あなんそんしやのあそはしたり。しちしやうるりの水かめ、しやくせん
たんのけひたい、へいるりの花たて、せんたんのけうそく、にくたんし
ゆのしゆつ、一れんくわうこのとらの」(9オ)かわ、こんしきのし、の
皮、くわその皮三まひ、かゝるたからの其中に、しやくせんたんのみそ
きにて五寸のしやかを作りたて、にくしきの御しやりを御しんに作りこ
めながら、はう八寸のすいしやうのたうの中におさめて、むけほうしゆ
となつて是を一のてうほうにし、をくた」(エ)りふみをへつしに書、
いしのはこにおさめて送らせ給ひけるとかや。此玉は則こうふくしの本
ぞん釈迦」(9ウ)仏のみけむにゑりはめ給ふへき也、と書こそおくり給
ひけれ。へさてしもかゝるてうほうを、たれかわしゆこしおくるへき、
きりやうの人をゑらめとて、兵をめさるゝに、かうほく道のすへうんし
うと云國にまんこしやうくんうむそうとて、たいかうの兵あり。おとら
ぬ程の兵を三百人相添て、へ都を立て大唐の明州の湊より、へ一葉の船
にさほをさし、おひてのかせにほ」(10オ)をあけて、数千万里をおくり
けり。へさる間、波のそこにすみ給ふ八大りう王のそう王、玉の日ほん
に渡る事をしんつうにてしろしめし、もろくのりうわうたちをあつめ
ての給ひけるは、へ我等はすてにかひていのりうわうたりといへとも、
五すひ三ねつは隙もなく、おつかうにもあひかたきしやくせんたむのみ

そきにて、五すんのしやかのれひふつの、此波の」(10ウ)上を御通りあ
る。いさくむはい取て我等しやうかくなるへし。尤しかるへしとて、
八大龍王の波かせあらくたちければ、船ひやうたうしちん」(ハ)さんし、
なみる」(ハチ)もしつかならさき。され共きとくふしきの仏のめした
る御船なれば、へしやうかひの天人は雲をしのき、ふつほうしゆこのや
しやらせつは波風をしつめさせたまひ、舟に子細はなくして、みつはの
そやをいることく、こ」(11オ)とさらおひてとそなりにけり。龍王い
と、いかりをなし、なみかせにてと、めすはおさへてむはひとるへし。
さあらん程に異國のものもさためてこわくふせくへし。りうわうのけむ
そくにしゆらはたけき兵なればたのふてみん、との給ひて、あしゆらた
ちをそめされける。かのしゆら共の大しやうまけいしゆら、もろくの
けむそくをひきくしてこそいて」(11ウ)られける。もとよりこのむとう
しやうなれば、百千にやつかんのけんそく共を異形いるひに出た、せ、
ほこたうちやうをとりもたせ、かたきは数万騎候共、いくさは家のもの
なれば玉におみてはむはひ取てまいらすへし、と申て、日本と唐土との
へ塩さかひちくらかおきにちむをとり、まんこかふねをまちにけり。こ
れおはしらすまんこはしゆむ風にほをあけ、心にまかせふかせゆくに、
日比あるへ」(12オ)しともおほえぬ所にしま一ツうかへり。みればはた
あしひるかへし、くろかねのたてのあひよりもつるきやほこのいなひか
り、たうちやうのかけ共かうむかのことくみへければ、あれは何と云た
るしたひそや、いかなる事のあるへきと、こゝろもとなくおもひけれと
も、さあらぬてひにて吹せゆく。彼しゆら共の大しやうまけいしゆら一

ちんにすすみ出、天をひゝかす大音にて、唯今爰元にせきをす(11)「(12ウ)すへたる兵をいかなる物とおもふぞ。かいりうわうのけむそくにしゆらといへるもの也。しいしゆをいかんとおほすらん、御舟に御座有しやくせんたのみそきにて五寸のしやかのれいふつ、よのたからはほしからず。そのすいせうの玉とをす事有ましきぞ。すみやかにわたされ候へ。さらすは一人もとをすましると申。まんこ此よしきくよりも、船のへいたにつつたちあかり、あらことくししい(13オ)きおひや、さてはおとにうけたまはるあしゆらたちにてましますよな。わか大こくのならひにて、百人か大しやうを百こといひ、千人か大将をせんこといひ、万人か大しやうをまんこと名つけ、しやうくと是をいふ。かひく敷はなけれ共、一まん人の大将なればまんこ將軍うんそうとはそれかしか事にて候。尤りうくうよりの御所望にしたかつて、すひしやうの玉まいらせたは(13ウ)候へとも、七御門のなかよりもきりやうの人とゑらまれ、日本のちよくしをたまはるときの日よりも、いのちを我君のおんのためたてまつる。されはめひのかるき事は此議による事なれば、いのちのあらんするかきりは玉におゐてはとらるましいぞ。けにと玉かほしくは、(14オ)万子をうつてとれやとて、からくそわらひける。しゆら共比由をきくよりも、さらは手なみを見せんとて、(14オ)てつちやうらんはのつるきをひつさけ、うむかのことくせめかかる。万子これを見て、かなふへきやうあらされは、舟底につつと入てしやうそくをそきたりける。万子か其日のしやうそくに、しんつうゆけのうてかね、さはんにかんのすねあてし、めうほうれむけのつなぬきはき、にむにくち

ひのよろひをくきすりなかにきくたして、あのくたら三みやく三ほたひの五まひかふとをぬくひにき、しの(14ウ)ひのおそしめにける。かうまりけむの大かたな真十文字にさいたりけり。大たうれんと云つるきをあしをなかにむすむてさけ、けんみやうれんと云ほこもつて、舟のへひたにつつたちあかり、三百余人の兵共思ひくにて立て、はし船おろしをしうかへ、すてにかけむとしたりけり。たうのいくさのならひにて、みたむにかゝる事はなし。てうしをとつてかくをうつて、拍子にあはせかけ(15オ)引、せひそろへのたいこはらむしよくしよつてうし、かけよと打たいこはさそうくとうつ也。ひけよとうつたひはおんてうこつとうつなり。(○しゆらとうじんのた)かいはむかしも今もためしなし。其うへしゆらかたかひに、くはゑんのあめをふらし、悪風をふきとはせ、はんしやくをふらす事は雪のはなの散かことし。つるきをとせほこをなけ、とくの矢をはなす事、まなこをまくかことし。身をか(15ウ)くさむとおもふときけしの中へわけて入、あらわれむとおもふ時しゆみにもたけお(16オ)くらふへし。かかるしんつうめひよをまのまへにけんし、こをせんととたかへは、すてにはやたう人心はたけくいさめと、此いきほひにおされてのかれかたくそ見へにける。四さるあひた万子は味方をけちし申けるは、とてもかなわぬ事ならば、しゆらか大将四五人底のみくつとなしてこそ、異国の聞えはよかる(16オ)へけれ。我とおもわん人々はさいこのともをしてたへと、こむかうかひのまんだらたひそうかいのまむたら、りやうかひしよそむ一千二百余尊のまむたらをほろにかけて吹そらし、舟底よりも馬とも引出す。万子か

ひさうの名馬にしんつうあしけとなつて、七き八ふむあけ六さひ、尾かみあくまであつうして、おつさまむかふよこはたはり、尾くちそうとうつまねのくさり、しゝあひほね」(16ウ)なみよめのふしは作り付たることくなり。らんでんのくらひ(17)を、おき、しよつかうのにしきのうわ敷に、こむくぬつたるりのあふみ、りきしゆの力皮をはしやうく(のちにてそめたりけり。おなしきおもかひをかけさせ、こかねのくつわかむしとかませ、にしきの手綱よつてかけ、万子ゆらりとうち乗て、なみにしつまぬうきくつを四つの足にかけたれは、なみのうへをはしる事はへいろを伝ふ」(17オ)ことく也。三百余人の兵共、何れも馬にのつたれと、みなくうきくつかけたれは、くもるにかりのとふやうに一むらかりにさつとちらし、しゆらかちんへ切て入。しゆらともこれをみて、一疋二疋のみならず三百疋の馬共か、いつれもなみをはしる事はふしきなり、ときもをけし、かほとにいさむしゆらとももにけまなこにそ成たりける。大将のあしゆらす、み出て云けるは、あふ愛」(17ウ)さうそ、かねてより申せし事のちかはぬ。なふめ(17)たれかほのすくやかし、おもてかほくせめにすみたて、いらむあらそひあらかふ儀には似ましき事にて候そや(17)。手をくたかてはいかにとしてかうみやうふかくか見えはこそ。一合戦せん、とて出立たりし有さまは、あくこうしむいのよろひをき、むみやうけむこのかふとのおほ(17)しめ、とうしやうむさんのほこつて、しむいくちのはたさ、せ、百せん」(18オ)にやつかんのけむそく共をあいたかへ、しきりにときをつくれは、へきてんやふれはしやうにおち、かひていをうこかしなみをあけ、こくうさなから

道や(17)とうや)うして、月のひかりもうつもれて、ひとへにちやう夜と成たりけり。此程音にうけたまはるまんこしやうくむうむそうに見参をせん、と云ままに、万子を中へとりこむる。まんこか兵事のこと、もせさりける、愛をせんと」(18ウ)と切たりけり。らこあしゆら三百人、からこむらあしゆら五百人、手をくたひてそきつたりける。万子はめひよのむまのり、うみのうへにてのる手綱、さうかひふとりやうはひのりうかへたる馬のあし、ゆむての者をつくときは、あふきやうのたつなきつとひく。めての者をつくとき、ひきやうのむちをてうとうつ。にくるものをおふ時は、せんきやうあをりのあふみのむちをきよくしんたひにのりたりけり。西か」(19オ)らひかしへ切てとをり、時には三百余人かあとにつき、愛(17)をせんと、きりたりけり(17)。入かひ(17)くた、かえは、しゆらかいくさはこたれか、つてかなふへし共見えさりけり。そう大しやうのまけいしゆら、八めんはつひを振たて、八したのほこをうちふり、討死、と也と、おめきさけんてはしりけり。まんこ是を見て、叶へきやうあらされは、うしほをむすひ手水とし、しよてんにふかくきせひする。しかる」(19ウ)へくはくはんせおん、ひ願たかへ給ふな。ふひくんしんちう、ねひくはんおんりきしゆおんしつたいさん。ちかひいまならては、しゆらかおそる、けまんのはたをた、さしかけよ、やあさしかけよ、と下知すれば、けまんならむはうたまのはたまつさきにさ、せ、われおとらしとせめかゝる。万子かつわものかつに乗て、はやおつふせおつふせきりたりけり。しんりきもつきはて、つうりきひきやうも」(20オ)かなはすし、底のみくつと成にけり。いきのこるしゆ

らともは、すみかゝにかくれたり。まんこかちとき作りかけ、もとの船にとりのり、しゆらたうしんのたゝかひにかちぬやゝ、といさみをなし、たうとかうらひはしり過、日本ちかふそ成にける。四さるあひたりうわう達、是をはさていかゝはせん、とそせむきせられける。其中になむたりうわうのたまひけるは、人間の心をたはからんにはみ」(20ウ)めよき女にしくはなし。りう女を以たはかつて玉をとるへき也。されはにや、りうくうのおとひめにこいさい女となつて、ならひなかりし美人たりしを、みめいくつしくかさりて、うつほ舟に作りこめ、なみの上ををしあくる。これをはしらす万子は、しゆん風にほをあげ、心にまかせふかせゆく。うみまんゝとして又はしやうちゝむたり。へきてんをおきぬく風かうゝとして又いつ」(21オ)れのほくそうにかこゑやとさむ。かしらなし、おほかいうたら、きとのしま、へもろみの嶋、もめい嶋、へさつまの国に鬼海嶋、へいきのもとおり、つしまのない、ことゆへなくはしりすぎ、九国の地をは弓手にみて、さぬきの国にきこえたるふさ崎のおきをとをりけり。へかゝりける所に、なかれ木一本うかんたり。すひしゆかん取あやしめをなし、爰にきたい成木こそ候へ。此間の大風に」(21ウ)ちんかうはし吹れてなかるゝ哉らん、と人々あやしめたりければ、万子きひて、なむのあやしめ事そ、たゝとりあげよ、と下知をする。御誕にしたかひ、はしふねおろしとり見るに、ちんかうにてはなし。あやしやわつてみよ、とて、是をわつてみるに、なにとこととはのへかたきひちん登人おはします。すいしゆかんとりこれを見て、をのまさかりをなけすてゝ、あつとはかり申。まんこ是を見て、」(22オ)い

かさまにも御身はてんまはしゆんのけゝんにて、しやうけをなさんそのためな、あやしやいかに、といひければ、何とものおはいはすしたゝなみたくみたる斗也。まむこかさねて申けるは、ひやなにとたくませ給ふ共、せひにつけておほつかなし、たゝ海底にしつめみくつになせ、といかりをなせは、あらけなき兵か御手にすかり海にいれんとする。へ龍女はいとゝあくかれて、あらうらめしの」(22ウ)人のことはや。野にふし山を家とするこらうやかむのたくひさへ、なさけはあると」(こそ)きけ。みつからと申は、けいたんこくの大王のいつきの姫にてさふらふなるか、有後のさむにより、うつほねに作りこめ、さうは万里へなかさるゝ。たまゝきとくふしきのしんりんにあひたれば、さり共とこそおもひしに、何の罪のむくいにうきかいていにしつむへき、うらめしさよ、とかきくとき、」(23オ)みたれかみをつたひて、へなみたの露のこほるゝは、つらぬく玉のことく也。しもをほひたるをみなへし、下葉しほるゝふせひし、せひしかやさうにすてられて、ひしきものにはそてしぬれ、ほす日のなしとわひけるも、今こそおもひしられたれ。かつらをかきしまゆすみ、はちすをふくむ口ひる、もゝのこひますあひきやう、なみと涙にうちぬれ、ものおもふ人のふせひかや。う」(23ウ)ちむつけたる御あり様、よそのみるめもいたはしし。へさしもにかしこきまんことは申せとも、やかてたるまかされ、けにゝさそおはすらん。それゝどうせむ申せ、とてやかて舟にのする。龍人のわさなればむかふさまにかせ吹、ふさゝきのおきに十日斗とうりうす。さなきたにりよはくはことにものうきに、まんこあまりにたへかねて、かせのたよりにかよひきて、

いねか」(24才)りそめのうたゝねは、何と成このおとたく、世にもすゝ
めのすみうきに、おとろかさむかいたはしさに、へあふきのかせをいさ
めつゝ、月てうさんにかくれぬれは扇おあけてこれをたとへ、かせたひ
きよにやみぬれは木をうこかして是をおしゆ。へあひみる人をこうるに
は文かよはねともこうるならひ、きみかこゝろをとりにくる。なふいか
にく、とおとろかす。龍」(24ウ)女はもとよりねもいらす。さりなか
らうたゝね入たる風情にて、たそや、夢みるおりからにうつゝともなき
ことの葉は。夢のうきよのあたなれは人のことはも頼まれず。よのま
にかわるあすか川、みつほのあはのかりそめに、風にきえぬることのは
の、すゑもとをらぬものゆへ、あなたたちては何かせむ。まじへ中く人
にははしめよりとわれぬはうらみあらはこそ。舞へそのうへ我は」(25才)
生れてより此かたかひもんをあやまたす、むしよりいまに至るまでおほ
くの生をうけし事、あるひは六よく四生に生れ、五すい八くのくを請、
あるひは三つしやくにおち、したひもつのひにあえり。かゝるさいこう
をふり、いま人間と生るゝ事もかいらきによつて、第一にせつしやうか
いをたもつてこゝろ(「心」のさうと成、ちうたうかいをたもつて
かんのさうと成、しやいんかいをたもつ」(25ウ)てひのさうと成、まう
こかひをたもつてはいのさうとなる、おんしゆかひをたもつてしんのさ
うとこれなる。是に五音しつせいあり。いはゆる、きうしやうかくちう、
そうわうひやうはんいちこつ、これ又みめうの御のりとし、こちのおん
せいはなり。これに五つのたましる有、こむしはくいしんなりき。此五
つのかたちをくそくし給ふをほとけと申。へ五つのかたちかけぬれは、

くちあんへいのちくるる」(26才)たり。いかにも仏をねかはん人は五か
いをよくたもつへし。ひとつもかいをやふりなは、むそくたそくのもの
と成てなかく仏になるましる。おほせはをもくさふらへ共、第三のかい
もむをいかにとしてやふらん、となみたくみたるはかりにて、おもひ入
てそおはしける。まんこもたいとうそたち、仏法るふの国なれば、あら
くかたり申。あらしゆせうや、さては後生の御ためにきむかいをたも
たせ給」(26ウ)ふか。そのかいもんのなかに六はらみつのきやうあり。
その中にとつても、んにくはらみつとは人の心をやふらす。いかに五
かいをたもつても、人の心をやふりなは仏には成難し。されはにや、仏
には三明六つうおはします。是はひとへに、くはこにしてしよはらみつ
をきやうせしそのとく、今にあらはれて仏と成給へり。へたとひ一度は
瀧の水、まじへにこりてすまぬ物成と、終にはすみてきよからん。」(27才)
恋には人のしなぬか、さてもむなしくこひしなは、一念五百せうけむね
んむりやうこう、生々世々の間につきせぬうらみのふかふして、ともに
しやしんとなるならば、仏にはならずしてしやたうになかくおつへし。
カタツメへかいの品あまたあり。五かいをよくたもつては人間と生れて五躰
をうくる也。十かいをたもつては天人と生れて五すいをうくる也。二百
五十かいは又しやうもんと生て仏には成」(27ウ)難し。五百かいをたも
つてはゑむかくとこれなり、是も仏にゑならず。ほさつさんしゆしん
かい、此かひをたもつてはやかてほさつとなりつゝ、仏とさらに難
し。大せうゑんとんかい、このかいをたもつてはやかてほとけになる也。
大せうのかいきやうは二念をつかぬかいなり。しんたひはむさうにてわ

か身もとよりしくう也。生死にもつなかれず、ねはんに更にちうせず。しやしやうすなはち」(28才)滑ければすゝくへきあかもなし、いとふへきほんなうなし。ねかひてきたる仏なし。みる一けんを法とし、きく事をみのりとす。爰をしらぬをまよひとす。いんよ(「や」)う二ツ和合のみち、いもせ夫婦のなからへ、これ仏法のみなもと、おろかにをもふへからず。御なひきあれやとそおもふ。いかにく、と申ける。御へりうによ聞しめされて、それは法心のみのりとし、仏法におひてもひさうのところなれ共、ねかふこ」(28ウ)となくしては仏に成難し。上代はきも上こんにして知恵も大ちゑなるへし。末世の今は下こんにて知恵ある人もすくなし。へ昔上代の大知恵の人たにもいへを出て妻子をすて、法のためになんきやうす。しちた大子はいかうなる万乗のくらゐをふりすて、わりなくちきりふかゝりしやしゆたら女をよそに見、十九にて出家をとけ、たんとくせんのほうれるあらら仙人を師と」(29才)頼、わしの小山のれいほうに薪をこり身をこかし、せんこくにむすふあかの水、こほりのひまをくむたひに、あなたは袖のつららとなる。よるは又よますから仙人の床の上にし、座せんのとこのふとんとなり、かゝるしんくのこうをつみ、まさしく釈迦になりたまひ、三かいのとく尊ししやうのゑことましくて、一大しやうけうをときひろめ給ふ也。こゝをもつてあむするに、やあほんの」(29ウ)ふそくほたひしん生死そくねはんとて、さいしをたひしきふらひて仏とやすく成ならば、なとやたいししやくそんは、わうのくらしいをふりすて、后をるとひ給ひけむ。其外しようくはのらかんだち、いつれかさひしをたいしてほとけとなりし人がある。さても仏

の御をとゝなむた太子と申せしは、しうきほんなうつきすして女人をたにし給ひしを、かくては仏にならしとて、仏はうへんめくらし」(30才)て、浄土地獄の有さまをそくしんにみせたてまつり、終に出家をとけさせて、なむたひくとそなし給ふ。へるとゝこのむしやきやうをよしとをしへ給ふは、まうもくにあしき道をしゆる風情成へし。かやうに申せはとて、もとより我は仏にてあるなり。こくういちしやうとう一たひ、かしらはやくし、みゝはなはあみた、むねはみろく、腹はしやか、こしは大日如来也。其外十方の諸仏達、諸のほさつと」(30ウ)し、わかたにくそくし、十方のこくうにほうによとしておはします。来もせずさりもせず、いつもたえせすましますを法心仏と申、形を作りあらはし、浄土を立て住家とし給ふをほうしん仏と申也。八相成道したまひて法をときすなはち衆生をりやくし給ふを応身仏と申也。三身おとりわき、一しむのしんするをさとりまへのほとけ也。三身一そくとくはんしつゝ、いづれを」(31才)もしんするをさとりの前と申、仏とならん其ためなんきやううきやうせんもの、いかてせむ悪みたるへき。身は徒になさるゝとかなふまし、とそおほせける。さるあひたまんこは殊外に腹をたて、いかにやくゝきこしめせ。仏をねかふ人はみな、たうとちゑとししん、一つかけては成難し。たうといつはきやうたい、知恵といつはさとりやしむ、ちひといつは一さいのしゆせうをふかくあはれみて、人の心に」(31ウ)したかへり。第一しひのかけては仏とさらに成かたし。あふしよせむものを申せはこそことはもおほくつくれ、今はものを申ましゐかくてひれふしおもひしじとなつて、此世のちきりこそあさくとも、ち

こくかきちくしせうしゆらにんてんに生れかわり死かわり、六道四生の
其中をくるりくとおひめぐりて、うさもつらさものちの世におもひし
らせ申さん、とて其後ものを申さす。りう女「(32才)は本よりかやうに
めされむため、たはかりすませたまひ、玉をのへたる御手にてまご
かたもとをひかへさせ給ひ、なふいたふなうらみ給ひそ。けに心さしの
ましまさはみつからか所望をかなえてたへ。草のまぐらのうたゝねの、
露のなさは夢はかりちきりなむ。万子余りのうれしさに、かつはとお
きていたき、まことに御座候か。二ツとなきいのちをもまいらせむ、
と申。龍女きこしめされて、い」(32ウ)やそれまでもさふらはす。けに
やらむ、しやくせんたむのみそきにて五寸の釈迦のれい仏のましますよ
しを、此舟内にてきゝまいらせてさふらへは、其玉を一夜みつからにあ
つけさせ給へ。ともかくもおほせにしたかふへし。万子きいて、あらし
やうたいなや、自余の所望かところおもひてあるに、其すいしやうの玉
におゐては中くおもひもよらぬ事也、とふつつとおもひきりけるか、
へ何程の事のあるへ」(33才)きと思ひなをし、さても御身は何して御存
候ひたるぞ。やさしくも御しよもう候ものかな。さらはそつとおかませ
申さん、とて、鉄しやうをさし印判を以てふうしたる、へ石のからうと
の中よりすいしやうの玉を取出し、龍女の方へ渡す。けいせいと書ては
みやこかたふくとよまれしも今こそおもひしられたれ。かくてしうあひ
れんほのわりなきちきりと見えつるか、三日も過ぎるにかき」(33ウ)け
すやうに失ぬ。玉はと人にみせければ、とりてうせぬと申。へ只はうせ
むとあきれはて、こくうに手をこそたたくすれ。へあらくちおしや、

りう宮のみやこよりたはかりけるをしらすして、とかふ申にをよはず、
とのこるたからを先として、いそぎ都へ上り、さまくのほうふつこと
くく取出し、たいしよくはんにまいらせあくる。たいしよくはんは御
らんして、おくり文の其中に第一のたからもの、すいしやうの玉の見え
ぬ」(34才)はいかに、とたつねとひたまふ。つゝむへきにあらす、あり
のまゝに申上る。かまたり聞し召れて、余りおもへは無念成に、せめて
我をくそくして其浦の有様をみせよ、とおほせければ、うけたまはる、
と申て、もどりの舟にのせ申、房崎のおきへおし出し、爰成と申。只は
うくとしたりし波の上を御覽して、むなしくもとり給ふ。へ道すから
思しめす、さもあれ無念成ものかな。三國一のてうほうを」(34ウ)我朝
の宝にはなさずして、徒に龍宮のたからとなしけん口おしきよ。能々
物をあんつるに、龍宮かいは六道におゐてもちくしやうたうの内、人間
のちゑにははるかにおとるへきもの、かあらん時は何としてたはかられ
けるふしきさよ。へ我又せんけうほうへんし、いかにあんをめぐらし、
へ此玉においてはとらふすもの、とおほしめし、宮こにかへり給ひて朝
夕あんをめぐらし、玉をとるへきはかり」(35才)事、くふうましくけ
れとも、さすか海中へたつて、たしうゑんたうならされは舟のかよひ
路あらはこそ。しかりとは申せとも、しんそくにおゐておや。たいせ太
子のかたしけなく、によいの玉をとらんとて、ゑひしのかひをもつてき
よかいをはかりつくしつゝ、終にはうしゆ得たまへり。大くわんとして
は又つるにむなしき事あらし。われもちかいてねかはくは、しやう
くせゝの間に此玉「に」をいてはとらふす」(35ウ)物とおほしめし、

都の内を忍び出、かたちをやつし給ひ、又ふさ崎へくたたる。へかのうらにつかせ給ひ、浦のていを見給ふに、海士共おほくおりひたり、かつきする事おひたしおひたし。かあまの中に、年のよはひ廿斗に見え、みめ形しんしやうなるか、ろすいにもつれてあそふ事へいろを伝ふことし。かまたり見こめ給ひ、かの海士のとまやにやとをかり、むなしく日かすをおくらせ給ふに、あまにもいまたつまもな(36才)し。へかまたりたひのひとりね、ともさひしき事なれば、こにて日をや重けん、いねかたけれどもひめまつ、はやうら風にうちなひく、なにはもつらきうらなから、そよよしあしと云語りて、二人あればそなくさみぬ。うきねのこのかち枕、波のよるにも成行は、ともなきさのさよ千鳥、吹しほりたる浦風に、こゑをくらふるなみのをと、すさきのまつにさきあれば、木すゑを波のこゆるに(36ウ)似て、塩やのけふり一むすひ、すゑはかすみにきえにほひ、夢路に似たるうたかたの、なみのこし舟かすかにて、からろの音のとをければ、花になくねのかりかねか、われも都の恋しさに、こゑをくらへてなくはかり、うき身なからもまきのとを、あけぬ暮ぬと過行は、みとせに成は程もなし。へかくて男女のなからへ、わりなき中の御ちきり、わか君出来給ふ。今はたかひに何事をもうちとけたりしふせ(37才)ひなり。かまたり仰けるやうは、今は何をかつむへき。我こそその名かくれなき大職冠とは我事也。心にふかき望のありてこの程これにありつるぞ。しかるへくはしよもうをかなへてたひてんによや。へあま人うけたまはり、なふこはまことにて御座さふらふか。あらはつかしや、四かいに御なかくれもなきかゝる貴人に

したしみ申ける事よ。ひとつはみやうかつきへし、一ツはくちよ下賤にて、はた(37ウ)ゑはなみの荒磯、たちゐは磯のなかれ木、こゑはあらいそにくたくるうつせ波の音、へかみはやしほにひきみたし、つくものことくなる身にて、都の雲の上人におきふしひとつ床にして、見ゑぬるこそはつかしけれ。しかし只身をなけてしなん、とこそくときけれ。へかまたり聞召れて、やさしくも申ものかな、とてもしなむすいのちを我ためにあたえ、りうくうかいへわけいり、(38才)たつぬる玉のありところをみてかへれ、との御説也。あまひと承り、りうくうかいとやらんはありとはきいていまたみす。行てかへらん事かたし。たとひいかなるおほせなり共何かわそむき申へき、とかまたりにおいとまを申、一葉の舟にさほをさし、奥をさしてこきいて、なみまをわけてつと入、一日にもあからす二日にもあからす、三日四日もはや過て、七日にこそ也にけれ。へかたまりおほせ(38ウ)けるやうは、あらむさんや、今ははや底のうほのえちきにも成ぬるか。あやしやいかにおほつかなし、と御心をつくさせ給ふ処に、よみかゑりしたる風情にてもとの舟にそあかりける。いかにとはせ給へは、しはしは物を申さす、やゝあつて申けるは、此地よりも龍宮かいへ行道は事もななめの事ならず。ひとつのかしらをさきとして、くらき所を守てちいろの底へわけいるに、うしほのろすひつきぬれば、くれなゐの色の水(39才)有。なをし底へ分入に、こかねのはまにおちつく。五色のれんけをひふし、あをきくちなうおほくしてれんけのこしをまとへり。なをし先を見渡に、れい川きよくなかくれ出る。みつの色は五色にて、さうかんだかくそはたてり。川に一つの

橋有。七ほうをちりはめ、玉のはたほこ立ならへ、風にまかせてへうよ
うす。へかのはしをわたるに、あしすましくきもきへ、ゆめうつゝ
共わきまへす。なをし先を見渡す」(39ウ)に、ろうもん雲にさしはさ
み、玉のまくさはかすみのうち、こかねのかわらは日にひかり、さうて
んまてもかゝやけり。三重のくわゐらうに四しゆのもんをたてたる一つ
の大里おはします。龍宮ちやう是成けり。へいるりのはしらをたて、め
のうのゆきけたにはりのかへを入にけり。四しゆのまんしゆのやうらく、
たまのすたれをかけならへ、ちやうにはあやをかけつゝ、とこににしき
のしとねをすき、ちんたんを」(40オ)ましへ、なをらんけいのみかきた
て、かゝる目出度きうたくに、しやかつたりうわうはしめとし、わしゆ
きつりうに至るまで、ほうさをかさり座せらるゝ。もろくの龍とく
りう、こかねのよろひ甲をきて四つの門をまほれり。さてもたつぬる玉
をは別にてんを作て、たからのはたをたてならへ、かうをもり花をつみ、
二六時中にはんのもり、いねうかつかう中くんに申に及はさりけり。八
人の龍王時々刻々に」(40ウ)しゆこすれば、此玉をとらむ事今生にては
かなふまし。まして未来に取難し。おほしめしきり給へ、わかきみ、と
こそ申けれ。かまたり聞しめされて、さては玉の有所をは慥に見つるも
のかな。有とたにもおもひなは取ゑん事はけつちやう也。龍王共も其あ
ひたはかりことをめくらし、たはかつてとりたれば、我もたくみをめく
らし、たはかつてとるへき也。へそれりうわうは五すひ三ねつひまもな
く、くる」(41オ)しもおほき物そかし。此くるしみをまぬかる事はしら
へのおとによもしかし。こゝを以あんするに、りうわうをは舞とくわん

けむにてたはかるへし。此うみのおもてに極楽浄土をまなふへし。玉の
はたほこたてならへ、さて又かくやをかさらせ、ひたり右のかくやにけ
むくはんをしらへすまし、そのみきりにみめよきちこそろへ、おんか
くをそうするほとならはたゝ天人に似たるへし。さあらんほとに大僧正
からり」(41ウ)むをうちならし、上天下かいのりうちんをくはんちやう
する物ならば、すゝめによつて神仏ののそみらいりんましますは、龍宮
の都より八大りう王さきとして、もろくのけんそく共を引くしてこそ
出らるへし。そのあひたは龍宮かいはりう一人もあるまじきそ。留守
の間をうかゝつてそろりと入てぬすみとつて、やあたへかし、とこそお
ほせられ、へあま承り、あらゆゝしの君の御たくみやさふらふ。」(42
オ)かゝるせんけうなくしてはいかてたやすくとりゑなむ。たゝし留守
の間なり共玉のけいこはあるへし。たとひむなく成共、玉においては
しさいなくとりあげ、君に参らするへきか、もしもむなくなるならば、
又たらちねのみとり子のちふさはなるゝ事もなし。きみならては後の
世をあはれむ人のあるへきか、とてなくより外の事はなし。かまたり
聞しめされて、心やすくおもへ、」(42ウ)もしもむなく成ならば、け
うやうのためにならぬ都に大からむをこんりうすへし。此若においては
いまたようち成共、都へくしてのほり、天下の御めにつけ、ふさゝきの
大臣とかうし、藤原のとうりやうたるへきよし、御物語有ければ、あま
人うけたまはり、悦事はかきりなし。やかて都へ使者をたて、舞ぬしを
めしくたし、あたりのうらの舟をよせ、しゆたんをもつていろとれるふ
たひをこそいりたて」(43オ)けれ。十丈のはたほこ百なかれたてなら

へ、風にまかせてひるかへせは、惣海はやかて浄土と成。ひたり右のかくやにかさりたてたる大たいこ、まむまくをひかせ、しゆれんに玉のすたれをかけ、へほう座をさうにかさらせて、へうけむちとくの大僧正、へからりんをうちならし、へ上てん下かいのりうちんをおとろかししやうすれば、大りうわうしゆらいしてせむきまぢく也けり。なむせんふし(44才)うふさゝきの浦にして、ほうさをかさりちうしやうあり、いさやらいりんやうかう有てちやうもんせん、とせむきして、そこはくのけむそく共を引くしてこそ出られ、すてにりうしん出給へは、國中のちこ達身をかさりまうけ、爰をせんとまひ給ふ、たゞ天人のことく也。さるほとに龍神、五すい三ねつたちまぢまぬかれ給ひけるあひた、何事もうち忘れ、舞にみとれ給ひてふさ崎に日をそくら(44ウ)るゝ。へあはやひまこそよけれ、とてあまも出たちをかまへける。五しきのあやを身にまとひ、夜光の玉をひたいにあて、かねよき刀脇はさみ、ぬのつなのはしを腰に付、なみまをわけてつつと入。たとひ男子の身成共、一人海へいる事はとくのうほれうかめ大しやのおそれもあるへきに、申さんや女の身として一人うみへいる事は、ためしすくなき次第也。数千里のかいろを過、龍宮の都(45才)につきにけり。見をきたりし事なればまよふへきにてさふらはす、龍宮のほうてんにあかめをくすいしやうの玉、おもしろいまゝにぬすみ取て、こしに付たるやくそくのぬの綱をうこかせは、せんちうの人々、あはややくそくゝなり、とてんてにつなを引にけり。あまもいさみてかつけはうへよりいととひきあくる。今はかうと思ふ処に、玉を守る小龍王跡をもとめてをふ事は、みつはのそ(45

ウ)やをいることく、すてにはや此つな残りすくなく見えし時、舟中の人々、あはやほのかにみゆるは、あふとりあけよ、とけちするに、あまのあとにつゐてひとつの大しやをふてくる。たけは十てう斗にて、ひれにつるきをはさみたて、まなこは只夕日のみつにうつるふことく也。くれなゐのことくなるしたのさきをふりたて、すきまなくおつかくる。あまかなはしとおもひける間、刀をぬいてふせきけり。せん(46才)中の人々此由を御らんし、手をあかき身をいたき、おつつふひつころんつ、あはやくとおほせけり。かまたり御覽し、きよけむをぬき、ようちのとききつねのあたえたひたる一つのかまにとりそへ、とんていらんとし給ふを、船中の人々ゆんでめてにすかつて、こはいかにととめけり。すてにはや此つなのこりすくなく見えし時、大しやはしりかゝつて、なさけなくもかのあまの二つのおしをけち(46ウ)きれば、みつのあほとそきえにける。へむなしきしかいを取上、一度にわつとさけふ。かまたり御覽して、玉はとりえぬ物故に、二世のきえんはつきはてぬ。むねの間に疵有、大しやのさけるのみならず、あやしめ御らん有ければ、此疵の中よりもすいしやうの玉出させたまふ。大しやのおつかけしとき刀をふるで見えしは、ふせかんだめになくし、玉をかきさんそのために、わか身をかいしける(47才)かとよ。せめて此疵をわか身少おひたらは、かほとにものは おもふましきを、女ははかなきありさまかな、おつとのめひをちかゑしとていのちをすつるはかなさよ。ともしひにきゆるよるのむしはつまゆへ其身をこかすなり。笛に寄秋の鹿ははかなきちきりにいのちをうしなふ。それは皆くしうあひれんほのわりなきちきりと

はいひなから、かゝるあはれはまれ成へし。我には二世の」(47ウ)きゑ
んなれは又こん世にもあひみなむ。なむちは今こそかきりなれ。わかれ
のすかたをよくみよ、とて、いとけなきわか君をしかひにをしそへたり
ければ、しゝたるおやとしらぬ子の、此程母にはなれつゝ、たまにあふ
たるうれしきに、むなしきちふさをふくみつゝはゝのむねをたゞくをみ
て、上下はんみんをしなへて皆なみたをそなかしける。へあまはむなし
く成たれとかしこきせんけう方」(48オ)便によつて、龍宮かいへむはわ
れしむけほうしゆをことゆへなくむはい返したまふ事、有難しともな
くくんに申をよはさりけり。此玉をすなはちおくりふみにまかせ、こう
ふくしの本尊釈迦仏のみけむにゑりはめ給ひけるとかや。しやうしんの
れいさう、しやくせむたんのみそきにて五寸の釈迦を作り、にくしきの
御しやりを御しんに作りこめなから、方八寸のすひしやうのたうの」(48
ウ)なかに納て、むけほうしゆとなつて、三國一のてうほう、りうわ
うのおしみ給しことわりとこそきこえけれ。」(49オ)